



土に活

土が固くしまる秋だからおすすめ

- 土中微生物の働きをよくし土を元気にする
- 通気性、排水性がよくなり根の活力を高める
- リン酸やカリの吸収をよくし肥料残りを軽減する

現在の生育状態はひと鉢ごとに違う 肥料管理はひと鉢ごとが基本

肥料調整剤が効かない…その前に生長期にどのような肥料の与え方をしたかを考える

“肥料調整剤が効かない”こうした声を聞くのは決まって9月になってからです。効かないのはそれなりの理由があるはずです。

それは、肥料調整に至るまでの(8月末頃までの)肥料管理です。この部分の間違いをすべて肥料調整に責任転嫁していることはないだろうか。

生長期に葉っぱが異常に濃くなったり、巻きぎみになっても肥料を与え続け、さらに追込み肥を与えるような肥料の与え方です。この状態では肥料調整を行ってもなかなか効果を上げることはできません。

鉢の中は肥料濃度が高まり、根は生きているのが精一杯で働きが非常に悪くなっている状態です。

この状態は根の最も重要な根毛部分の発達が悪くなったり、根いたみとなっている場合がほとんどです。この根毛部分はリン酸やカリを最も良く吸収する部分です。

肥料調整剤はリン酸とカリを主体とした肥料である為、非常に吸収しにくい状況になっていて、効果の上がないのも当然です。

肥料調整の効果が上がらないのは“肥料調整剤”の問題ではなく夏の肥料の与え過ぎが原因です。

肥料調整とその目的…チッ素を消化させ円滑に開花期に移行する

「肥料抜き」「チッ素抜き」などとも言われています。

何か肥料が取り除かれるようにも聞こえますが茎葉にたまったチッ素分を消化させることです。そして、秋の肥料調整は茎葉にたまったチッ素分を消化させることで、体内の肥料バランスを整え開花促進を図ります。

肥料調整の時期は9月中旬～下旬が目安です。

使用する肥料はリン酸とカリ、カルシウム、マグネシウムなどを含んだ肥料(=肥料調整剤)が最適です。

夏に肥料を与え過ぎたり、根いたみなどを起こし培養土に予想外に肥料が残り、たまってしまう場合があります。

この様な鉢は肥料調整剤の使用だけでは、次々と肥料を吸い上げてくる為、肥料調整が全く進まなくなる場合がよくあります。

この様な状況が予想される場合は、肥料調整に入る前に培養土の肥料除去(エストールを使用)した後に肥料調整を行うことが効率の良い方法です。

肥料除去をする利点は、肥料濃度が低くなり、新根の

発生を促し、肥料調整剤の主な成分であるリン酸やカリを吸収する根毛部分が再生できることです。

肥料過多では根毛の部分の発達が悪いが損傷を受けている場合が多く、元々非常に吸収しにくい状態にあるわけです。

肥料除去により根毛が再生されることは肥料調整剤の効果を非常に高めることになります。

肥料調整剤の使用回数は2～3回を目安に施肥します。葉色がうすくなる為、効果を確認できます。

肥料調整の手抜きは大きな問題が残ります。

茎葉に未消化のチッ素が残ったまま開花させると「花弁が厚く、硬くなる」「花弁の伸びが悪い」「花が大きくならない」「花ぐされが出やすい」「花にシミが出やすい」など気品ある雄大な花にはなりません。

肥料調整は優秀花を咲かせる為には非常に重要です。



秋だからおすすめ 透水源

水ハケ、通気性をよくし、根ぐされを防止する

秋になると土はバテぎみ、微生物の働きが低下し、団粒構造が維持できなくなります。土は固くしまり、酸欠ぎみとなる。

根ぐされや根いたみ、根の活力低下などが起きやすくなる。

透水源は水のしみ込み・拡散をよくし、強制的に排水性や通気性を高め、酸欠状態を改善し根の活力を向上し、肥料の吸収を良くし優秀花を咲かせます。